

表4 土器観察表(1)

No.	遺構(地区) 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 壺	口径14.6※ 器高4.9△	外面口縁～肩部ナデ、ミガキ。赤彩。煤付着。内面ナデ、赤彩。	密(砂粒を含む)	良	外面赤灰色 内面赤色	
2	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 壺	口径14.8※ 器高3.0△	外面ナデ。口縁部4条以下の平行沈線文か。磨耗のため不明瞭。内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面橙色 内面淡橙色	
3	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 小壺	器高7.2△	外面肩部8条の平行沈線文。胴部ナデ、ミガキ。赤彩。煤付着。内面胴部ケズリ後ミガキ。磨耗のため不明瞭。	密(砂粒を含む)	良	外面灰黄褐色 内面黒褐色	
4	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕	器高4.9△	外面口縁部4条以上の平行沈線文。肩部貝殻腹線による刺突。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。全体に磨耗。	密	良	外面浅黄褐色 内面にぶい黄褐色	
5	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕	口径14.8※ 器高4.7△	外面ナデ。口縁部波状文。磨耗のため不明瞭。内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面明黄褐色	
6	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕	器高3.95△	外面ナデ。口縁部8条以上の平行沈線文。磨耗のため不明瞭な箇所有り。内面口縁部ナデ、頸部ケズリ。	密	良	内外面にぶい黄褐色	
7	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕	口径11.4※ 器高3.8△	外面ナデ。磨耗のため調整不明瞭。内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密	良	外面浅黄褐色 内面にぶい黄褐色	
8	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕	口径13.4※ 器高15.5△	外面口縁部ナデ。頸部以下磨耗のため調整不明瞭。胴部ミガキ、下半煤付着。全体に磨耗。内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ、指押さえ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面にぶい黄褐色 内面にぶい黄褐色・灰黄褐色	
9	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕	口径14.0※ 器高6.4△	内外面磨耗のため調整不明。	やや密(砂粒を多く含む)	良	外面黄橙・浅黄褐色 内面浅黄褐色	
10	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 甕	口径17.2※ 器高8.3△	外面ナデ。口縁部7条の平行沈線文。肩部煤付着。内面口縁部調整不明。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面淡赤褐色 内面灰色	
11	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 甕	口径18.2※ 器高5.4△	外面口縁部ナデ。5条の平行沈線文。頸部指押さえ。全体に磨耗。内面口縁部ナデ。頸部以下ケズリ。全体に磨耗。	密	良	内外面浅黄褐色	
12	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 甕	口径15.4 底径5.0 器高24.3	外面口縁部12条の平行沈線文。肩部6～7条の平行沈線文。波状文。胴部ナデ、ミガキ。底部ナデ。内面口縁部ナデ、ミガキ。胴部上半ケズリ後ミガキ。胴部下半・底部ケズリ後ナデ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面橙・にぶい黄褐色 内面にぶい黄橙・橙色	
13	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 甕	口径13.1 底径4.6 器高24.0	外面口縁部ナデ、ミガキ。肩部・胴部ハケ後ナデ、ミガキ。底部ナデ。内面口縁部ナデ、ミガキ。胴部上半ケズリ後ナデ、ミガキ。胴部下半・底部ケズリ後ナデ、指押さえ。	密(砂粒の含有量少ない)	良	内外面にぶい橙色	
14	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 甕又は壺	底径1.7※ 器高3.6△	外面底部ナデ、ハケ、ミガキ。底面ナデ。内面ケズリ、指押さえ。煤付着。	密(砂粒を含む)	良	外面にぶい黄橙・明赤褐色 内面黄褐色	
15	SI1 ①層	第9図 PL21	弥生土器 甕	口径21.2※ 器高7.7△	外面ナデ。口縁部9条の平行沈線文。肩部貝殻腹線による刺突。内面口縁部調整不明。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面にぶい橙色	
16	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕	口径20.6※ 器高5.2△	外面ナデ。口縁部10条の平行沈線文。内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面浅黄褐色 内面淡黄色	
17	SI1 ①層	第9図 PL22	弥生土器 甕又は壺	底径7.6※ 器高4.4△	外面ナデ。全体に磨耗。内面ケズリ。	密	良	外面にぶい黄橙・橙色 内面灰褐色	
18	SI1 ①層	第9図 PL21・22	弥生土器 甕又は壺	底径1.7※ 器高3.6△	外面底部ナデ、ハケ、ミガキ。底面ナデ。内面ケズリ、指押さえ。煤付着。	密(砂粒を含む)	良	外面にぶい黄橙・明赤褐色 内面黄褐色	
19	SI1 ①層	第9図 PL21・22	弥生土器 甕又は壺	底径3.8※ 器高4.3△	外面底部ナデ、ミガキ。底面ナデ。内面ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を含む)	良	外面浅黄橙・橙色 内面にぶい黄褐色	
20	SI2 床直	第11図 PL23	弥生土器 甕	口径11.6※ 器高4.4△	外面口縁部5条以上の平行沈線文。磨耗のため不明瞭。頸部ナデ。肩部ナデ、貝殻腹線による刺突。内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を多く含む)	良	外面にぶい橙色 内面淡黄色	
21	SB1 P4 埋土	第13図 PL23	弥生土器 甕	口径18.6※ 器高5.1△	外面ナデ。口縁部14条の平行沈線文。黒斑有り。内面口縁部ナデ、黒斑有り。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を多く含む)	良	外面浅黄・黄褐色 内面浅黄色	
22	道路状遺構 埋土	第21図 PL25	須恵器 坏蓋	器高0.8△	内外面口縁部回転ナデ。	密	良	内外面灰色	
23	道路状遺構 埋土	第21図 PL25	須恵器 坏	口径10.6※ 器高1.8△	内外面回転ナデ。	密	良	内外面灰色	
24	道路状遺構 埋土	第21図 PL25	須恵器 坏	底径13.6※ 器高1.9△	外面体部回転ナデ、底部回転ヘラ切り後ナデ。内面体部回転ナデ。底部回転ナデ後不定方向ナデ。	密	良	内外面灰色	
25	道路状遺構 埋土	第21図 PL25	須恵器 坏	底径7.6※ 器高3.3△	外面体部回転ナデ、底部回転糸切り。磨耗のため不明瞭。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面黄灰色	
26	道路状遺構 埋土	第21図 PL25	須恵器 坏	器高3.8△	外面回転ナデ。内面回転ナデ。	密	良	外面褐灰色 内面灰色	
27	道路状遺構 埋土	第21図 PL25	須恵器 坏	器高2.6△	外面回転ナデ。内面回転ナデ。	密	良	外面灰色 内面灰黄色	
28	道路状遺構 埋土	第21図 PL25	須恵器 坏	器高2.9△	外面回転ナデ。内面回転ナデ。	密	良	内外面灰色	

表5 土器観察表(2)

No.	遺構(地区)層位名	挿図PL	種類器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
29	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	須恵器 坏	器高2.6△	外面回転ナデ。 内面回転ナデ。	密	良	内外面灰色	
30	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	須恵器 皿	器高0.95△	外面磨耗のため調整不明。 内面回転ナデ。	密	不良	内外面灰色	
31	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	須恵器 脚部?	底径12.8※ 器高1.4△	外面回転ナデ。 内面回転ナデ。	密	良	内外面灰色	
32	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	須恵器 甕	器高5.1△	外面平行タタキ。 内面同心円状当具痕。	密	良	内外面灰色	
33	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	須恵器 甕	器高8.4△	外面格子状タタキ。 内面同心円状当具痕。	密	良	内外面灰色	
34	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	土師器 坏	器高2.3△	外面回転ナデ、赤色塗彩。 内面回転ナデ、赤色塗彩。	密	良	内外面暗赤褐色	
35	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	土師器 高台付坏	底径8.4※ 器高2.3△	外面体部・底部ナデ。赤色塗彩。全体に磨耗。 内面磨耗のため調整不明。赤色塗彩。	密	良	内外面浅黄褐色	
36	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	土師器 高台付坏	底径7.0※ 器高2.9△	外面体部・底部回転ナデ。底部切り離し磨耗のため不明。 内面回転ナデ。底部指押さえ。	密	良	内外面明赤褐色	
37	道路状遺構埋土	第21図 PL.25	土師器 皿	口径18.6※ 底径14.0※ 器高1.4	外面体部回転ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ、指押さえ。 赤色塗彩。 内面体部・底部回転ナデ。赤色塗彩。	密	良	内外面明赤褐色	
38	道路状遺構埋土	第22図 PL.25	土師器 甕	口径39.0※ 器高7.8△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密	良	内外面にぶい黄褐色	
39	道路状遺構埋土	第22図 PL.25	土師器 甕	口径37.6※ 器高9.5△	外面口縁部・胴部ナデ。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。全体に磨耗。	密	良	内外面にぶい黄褐色	
40	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	口径31.8※ 器高4.9△	外面口縁部・胴部ナデ。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を含む)	良	内外面明赤褐色	
41	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	口径30.9※ 器高1.8△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面褐色 内面明赤褐色	
42	道路状遺構埋土	第22図 PL.25	土師器 甕	口径27.8※ 器高8.2△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(砂粒を含む)	良	内外面明赤褐色	
43	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	口径27.3※ 器高6.4△	外面口縁部・胴部ナデ。煤付着。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(砂粒を含む)	良	外面にぶい橙色 内面橙色	
44	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	口径27.0※ 器高4.0△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密	良	内外面橙色	
45	道路状遺構埋土	第22図 PL.25	土師器 甕	口径25.7※ 器高4.1△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密	良	外面にぶい黄褐色 内面にぶい黄褐色	
46	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	口径21.5※ 器高11.1△	外面口縁部・胴部ナデ。煤付着。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。全体に磨耗。	密	良	外面橙色 内面明赤褐色	
47	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	口径24.0※ 器高4.2△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面明褐色	
48	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	口径26.0※ 器高15.1△	外面口縁部・胴部ナデ。煤付着。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(砂粒を少し含む)	良	外面赤褐色 内面褐色	
49	道路状遺構埋土	第22図 PL.25	土師器 甕	口径27.7※ 器高5.1△	外面口縁部・胴部ナデ。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密	良	外面にぶい橙色 内面橙色	
50	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	器高5.4△	外面口縁部・胴部ナデ。煤付着。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(砂粒を含む)	良	外面橙色・褐色 内面褐色	
51	道路状遺構埋土	第22図 PL.25	土師器 甕	器高5.2△	外面口縁部・胴部ナデ。煤付着。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(砂粒を含む)	良	外面橙色 内面橙・明赤褐色	
52	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	器高3.1△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密	良	外面橙色 内面明赤褐色	
53	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕	器高4.2△	外面口縁部・胴部ナデ。 内面口縁部ナデ。胴部ヘラケズリ。	密(砂粒を含む)	良	外面明褐色 内面橙色	
54	道路状遺構埋土	第22図 PL.24	土師器 甕形土器	長5.6△	粗雑なナデ調整。全体に磨耗著しい。	やや密	やや不良	浅黄褐色	把手部
55	SD3埋土	第24図 PL.26	土師器 坏?	底径4.6※ 器高1.6△	外面体部回転ナデ。底部静止糸切り? 全体に磨耗。 内面体部・底部回転ナデ。	密	良	内外面橙色	
56	SD3埋土	第24図 PL.26	須恵器 高台付坏	底径6.8※ 器高1.9△	外面体部回転ナデ。底部回転ナデ。底部切り離し不明。 内面体部・底部回転ナデ	密	良	内外面灰色	
57	SD3埋土	第24図 PL.26	須恵器 甕	器高3.9△	外面平行タタキ。 内面同心円状当具痕。	密	良	外面オリーブ灰色 内面灰色	
58	SK7埋土	第33図 PL.23	弥生土器 壺	口径10.5※ 器高4.2△	外面口縁・肩部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面浅黄褐色	
59	SK7埋土	第33図 PL.23	弥生土器 甕	口径13.0※ 器高4.3△	外面ナデ。口縁部7条の平行沈線文。頸部炭化物付着。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ後ナデか。	密	良	外面にぶい黄褐色 内面褐色	
60	SK7①層	第33図 PL.23	弥生土器 甕	口径16.0※ 器高3.2△	外面ナデ。口縁部2条以上の平行沈線文。磨耗著しい。 内面ナデ。磨耗のため不明瞭。	密(砂粒を含む)	良	内外面浅黄褐色	
61	SK7埋土	第33図 PL.23	弥生土器 甕	口径16.4※ 器高6.3△	外面ナデ。口縁部2条以上の平行沈線文。頸部・肩部ハケ後ナデ。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を少し含む)	良	外面浅黄褐色 内面黄褐色	
62	SK7③層	第33図 PL.23	弥生土器 甕	口径11.4※ 器高2.7△	外面磨耗のため調整不明。口縁部煤付着。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。磨耗著しい。	密(砂粒を含む)	良	外面灰黄褐色 内面にぶい黄褐色	
63	SK7埋土	第33図 PL.23	弥生土器 甕又は壺	底径5.0 器高2.3△	外面ナデ。 内面ケズリ後ナデ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面灰黄褐色	

表6 土器観察表(3)

No.	遺構(地区)層位名	挿図PL	種類器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
64	SK7 底面	第33図 PL.23	弥生土器 甕又は壺	底径3.0 器高4.5△	外面ハケ、ナデ。全体に磨耗。 内面ケズリ後ナデ。	密(砂粒を 含む)	良	外面橙・暗褐色 内面黄橙・暗褐色	
65	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	口径13.2※ 器高7.0△	外面ナデ。口縁部5条の平行沈線文。肩部貝殻腹線による刺突。全体に磨耗。 内面口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。磨耗著しい。	密(砂粒を 少し含む)	良	内外面浅黄橙色	
66	SK8 埋土	第35図 PL.27	弥生土器 壺	口径15.1※ 器高15.8△	外面ナデ。口縁部7条の平行沈線文。肩部6条の平行沈線文、その下に波状文。胴部ハケか。磨耗のため不明瞭。 内面口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。磨耗著しく不明瞭。	密	良	外面にぶい黄褐色 内面にぶい黄橙・黄褐色	
67	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	口径16.0※ 器高7.5△	外面ナデ。口縁部6～7条の平行沈線文。肩部貝殻腹線による刺突。磨耗のため不明瞭。 内面口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。磨耗著しく不明瞭。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面浅黄褐色 内面浅黄色	
68	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	口径14.4※ 器高4.0△	外面ナデ。口縁部6～8条の平行沈線文。頸部指押さえ。 内面口縁部ナデ、頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面橙色 内面にぶい黄褐色	
69	SK8 埋土	第35図 PL.27	弥生土器 壺	口径16.5 底径6.8 器高24.7	外面口縁部5～6条の平行沈線文。頸部ナデ、指押さえ。肩部黒斑有り。胴部ナデ、ハケ、ミガキ。底部ナデ、ミガキ。黒斑有り。全体に磨耗のため調整不明瞭。 内面口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。磨耗のため不明瞭。	密(砂粒を 少し含む)	良	外面浅黄褐色 内外面にぶい黄褐色	ほぼ完存。
70	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	口径18.0※ 器高8.6△	外面ナデ。口縁部12～13条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部ハケ、ナデ。磨耗のため不明瞭。 内面口縁部・頸部ナデ、ミガキ。胴部ケズリ。胴部上位はケズリ後ミガキの痕跡残る。	やや粗(砂 粒を多く 含む)	良	内外面橙色	
71	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	器高6.1△ 胴部最大 径14.1※	外面肩部貝殻腹線による刺突。下に平行沈線文、後ナデ、ミガキ。胴部ナデ、ミガキ。全体に磨耗。 内面胴部ケズリ後一部ミガキ。	密(砂粒を 含む)	良	外面赤褐・明褐色 内面赤褐色	
72	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	口径10.8※ 器高6.4△	外面口縁部・胴部ナデ、ミガキ。肩部貝殻腹線による刺突。全面赤彩、煤附着。磨耗のため不明瞭。 内面口縁部・頸部ナデ、ミガキ。赤彩。胴部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面黒褐・暗褐色 内面にぶい赤褐・ ぶい黄褐色	
73	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	口径12.6※ 器高5.7△	外面口縁部・肩部ナデ、ミガキ、赤彩。 内面口縁部ナデ、ミガキ、赤彩。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面にぶい赤褐色 内面にぶい黄橙・褐灰色	
74	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺	口径9.6※ 器高5.1△	外面口縁部・肩部ナデ、ミガキ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ後ナデ、指押さえ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面明赤褐色	
75	SK8 埋土	第35図 PL.29	弥生土器 壺?	口径9.8※ 器高4.7△	外面口縁部ナデ。胴部ナデ、ミガキ。煤附着。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ、指押さえ。胴部ケズリ、ナデ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面明黄褐色	全般にナデ調整は粗雑。
76	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径14.1※ 器高10.4△	外面口縁部ナデ。肩部・胴部ハケ、ナデ。磨耗著しく調整不明瞭。 内面口縁部・頸部ナデ。胴部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面浅黄褐色 内面橙色	
77	SK8 埋土	第36図 PL.27	弥生土器 甕	口径15.1※ 器高6.7△	外面口縁部5～6条の平行沈線文。肩部ナデ。煤附着。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密	良	外面にぶい黄褐色 内面浅黄橙・にぶい黄褐色	
78	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径15.2※ 器高6.5△	外面口縁部10条の平行沈線文。肩部ナデ。赤色塗彩。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面橙色 内面にぶい黄褐色	
79	SK8 埋土	第36図 PL.27	弥生土器 甕	口径17.0※ 器高6.0△	外面口縁部4条の平行沈線文、煤附着。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による刺突。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	内外面にぶい黄褐色	
80	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径19.1※ 器高6.3△	外面口縁部7～8条の平行沈線文。肩部ハケ、ナデ。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面淡黄色	
81	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径14.6※ 器高3.8△	外面口縁部8～9条の平行沈線文、ナデ。 内面口縁部ナデ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面浅淡橙色 内面にぶい黄褐色	
82	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径14.5※ 器高4.8△	外面口縁部2条以上の平行沈線文、磨耗のため不明瞭。 頸部ナデ。赤色塗彩。 内面口縁部ナデ、赤色塗彩。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	内外面浅黄橙・赤褐色	
83	SK8 埋土	第36図 PL.28	弥生土器 甕	口径15.8※ 器高12.0△	外面口縁部13条の平行沈線文、頸部ナデ。肩部刺突。胴部磨耗のため調整不明。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面浅黄褐色	
84	SK8 埋土	第36図 PL.28	弥生土器 甕	口径17.1 底径4.4 器高27.1	外面口縁部7条の平行沈線文。頸部ナデ、指押さえ。肩部貝殻腹線による刺突。胴部・底部ナデ、ハケ後ミガキ。煤附着。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部～底部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面赤褐・橙色 内面橙色	
85	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径20.2※ 器高4.7△	外面口縁部9条の平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面にぶい橙色 内面橙色	
86	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径13.0※ 器高3.9△	外面口縁部7条の平行沈線文。肩部貝殻腹線による刺突。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 含む)	良	内外面浅黄褐色	
87	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径13.2※ 器高3.1△	外面口縁部6条以上の平行沈線文。磨耗のため不明瞭。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面橙色	
88	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径14.4※ 器高3.8△	外面口縁部15～16条の平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面明黄褐色 内面灰黄褐色	
89	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径14.8※ 器高4.8△	外面口縁部10条の平行沈線文、一部ミガキ。頸部ナデ。肩部3条以上の平行沈線文。赤色塗彩。 内面口縁部ナデ、ミガキ、赤色塗彩。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面明褐色 内面浅黄褐色	
90	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径17.8※ 器高5.7△	外面口縁部12条の平行沈線文。頸部ナデ、煤附着。肩部貝殻腹線による刺突。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面にぶい赤褐色 内面にぶい橙色	

表7 土器観察表(4)

No.	遺構(地区) 層位名	挿図 PL.	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
91	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径17.2※ 器高5.5△	外面口縁部13条の平行沈線文。頸部ナデ。 肩部貝殻腹縁による刺突。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 含む)	良	内外面橙色	
92	SK8 埋土	第36図 PL.28	弥生土器 甕	口径16.6※ 器高6.3△	外面口縁部9条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁 による刺突。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面浅黄橙色 内面浅黄橙・にぶい橙色	
93	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径17.8※ 器高5.1△	外面口縁部15条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部刺突か。 磨耗のため不明瞭。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ後ミガキ。	密(砂粒を 少し含む)	良	内外面浅黄橙色	
94	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径17.6※ 器高3.5△	外面口縁部6条の平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面にぶい黄橙色 内面浅黄色	
95	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径18.0※ 器高3.7△	外面口縁部10条の平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面黄橙色	
96	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径19.4※ 器高6.0△	外面口縁部平行沈線文、煤付着。肩部貝殻腹縁による刺 突。全体に磨耗し調整不明瞭。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	外面明黄橙色 内面浅黄橙色	
97	SK8 埋土	第36図 PL.30	弥生土器 甕	口径20.0※ 器高5.9△	外面口縁部5条の平行沈線文。肩部貝殻腹縁による押引 文。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密	良	外面灰黄色 内面褐灰色	
98	SK8 埋土	第36図 PL.31	弥生土器 甕	口径24.4※ 器高5.3△	外面口縁部5～6条の平行沈線文。頸部粗雑なナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。磨耗のため不明瞭。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面にぶい黄橙色	
99	SK8 埋土	第36図 PL.31	弥生土器 甕	口径22.0※ 器高5.9△	外面磨耗のため調整不明。煤付着。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 含む)	良	外面にぶい黄橙色 内面にぶい橙・浅黄・黄灰色	
100	SK8 埋土	第36図 PL.31	弥生土器 甕	口径22.6※ 器高6.3△	外面口縁部9～10条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝 殻腹縁による刺突。磨耗のため不明瞭。 内面口縁部磨耗のため調整不明。頸部ケズリ。	やや粗(砂 粒を多く 含む)	良	内外面にぶい黄橙色	
101	SK8 埋土	第36図 PL.31	弥生土器 甕	器高4.8△	外面口縁部6条の平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面橙色 内面淡橙色	
102	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径12.1※ 器高3.4△	外面口縁部平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面にぶい黄橙色	
103	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径12.0※ 器高3.9△	外面口縁部7条の平行沈線文。頸部ナデ。 肩部貝殻腹縁による刺突。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面暗灰黄・黄褐色 内面浅黄色	
104	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径12.0※ 器高3.7△	外面口縁部5条の平行沈線文。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ、下半ミガキ。	密(砂粒を 含む)	良	内外面赤褐色	
105	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径13.6※ 器高4.3△	外面口縁部7条の平行沈線文、煤付着。頸部ナデ。肩部 貝殻腹縁による刺突。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密	良	外面浅黄橙色 内面浅黄橙・橙色	
106	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径13.2※ 器高4.0△	外面口縁部9条の平行沈線文、煤付着。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面にぶい黄褐色 内面明黄褐色	
107	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径14.2※ 器高4.1△	外面口縁部9～10条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝 殻腹縁による刺突。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面にぶい橙色 内面にぶい黄褐色	
108	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径14.4※ 器高5.7△	外面口縁部11条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁 による押引文。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ、ミガキ。胴部ケ ズリ。	密(砂粒を 含む)	良	外面褐色 内面明赤褐色	
109	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径15.7※ 器高3.8△	外面口縁部13～14条の平行沈線文、煤付着。頸部ナデ。 全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面にぶい橙色	
110	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径14.2※ 器高6.4△	外面口縁部7条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁 による平行沈線。 内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を 含む)	良	内外面浅黄橙色	
111	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径15.4※ 器高4.6△	外面口縁部5条の平行沈線文。頸部ナデ、下位に刺突。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面明褐色	
112	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径16.0※ 器高5.2△	外面口縁部7～8条の平行沈線文。頸部ナデ。全体に磨 耗。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面浅黄橙色	
113	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径16.0※ 器高5.2△	外面口縁部9条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁 による押引文。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ、ミガキ(磨耗のため不明瞭)頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面にぶい黄橙色	
114	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径16.0※ 器高4.6△	外面口縁部12条の平行沈線文(6、7条が1単位)。頸部 ナデ。全体に煤付着。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面にぶい黄橙色	
115	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径16.2※ 器高4.7△	外面口縁部6、7条の平行沈線文。煤付着。頸部ナデ。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面にぶい黄橙色	
116	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径17.0※ 器高4.6△	外面口縁部7条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁 による刺突。全体に磨耗。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ後ナデ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面浅黄橙色	
117	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径16.0※ 器高5.9△	外面口縁部10条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁 による刺突。 内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 少し含む)	良	外面にぶい黄褐色 内面浅黄褐色	
118	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径16.4※ 器高4.7△	外面口縁部10条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹縁 による刺突。 内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を 多く含む)	良	内外面灰黄褐色	

表8 土器観察表(5)

No.	遺構(地区) 層位名	挿図 PL	種類 器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
119	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径17.0※ 器高7.6△	外面口縁部10、11条の平行沈線文。頸部・胴部ナデ。肩部貝殻腹線による刺突。内面口縁部ナデ、ミガキ。胴部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を含む)	良	内外面浅黄色	
120	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径16.6※ 器高5.0△	外面口縁部6条の平行沈線文。頸部ナデ、ミガキ。肩部貝殻腹線による刺突。内面口縁部ナデ、ミガキ、黒斑有り。頸部ケズリ、上位は後にミガキ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面明赤褐色 内面橙色	
121	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径17.6※ 器高5.3△	外面口縁部11条の平行沈線文(6条程度が1単位)。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による刺突。内面口縁部ナデ。胴部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面灰白色 内面灰黄褐色	
122	SK8 埋土	第37図 PL.31	弥生土器 甕	口径19.0※ 器高3.1△	外面ナデ。口縁部7、8条の平行沈線文(4条が1単位)。内面口縁部ナデ、ミガキ。	密(砂粒を含む)	良	内外面浅黄褐色	
123	SK8 埋土	第37図 PL.32	弥生土器 甕	口径18.8※ 器高4.1△	外面口縁部6条の平行沈線文。磨耗のため調整不明瞭。内面口縁部ナデ、赤色塗彩。頸部ケズリ。	密(砂粒を含む)	良	外面黄褐色 内面橙色	
124	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径19.0※ 器高7.2△	外面口縁部9条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による刺突。全体に磨耗。内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を含む)	良	外面にぶい橙・灰褐色 内面にぶい橙色	
125	SK8 埋土	第37図 PL.27・28	弥生土器 甕	口径18.5※ 底径4.6 器高28.0	外面口縁部12、13条の平行沈線文(6条が1単位)。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による押し文。底部ナデ、ミガキ。内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ、上位は後にミガキ。胴部ケズリ後一部ナデ。底部ケズリ、指押さえ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面にぶい橙～にぶい赤褐色	
126	SK8 埋土	第37図 PL.32	弥生土器 甕	口径19.4※ 器高5.6△	外面口縁部7、8条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による刺突。全体に磨耗。内面口縁部ナデ。胴部ケズリ、後一部ナデ。全体に磨耗。	密(砂粒を多く含む)	良	外面浅黄褐色 内面浅黄色	
127	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径19.6※ 器高7.0△	外面口縁部15条の平行沈線文、当たり不良で一部途切れる。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による刺突(不規則)。刺突の下位に波状文、磨耗のため不明瞭。内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面にぶい黄褐色	
128	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径20.4※ 器高7.8△	外面口縁部7条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による押し文。内面口縁部ナデ。頸部・胴部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面黄褐色	
129	SK8 埋土	第37図 PL.27	弥生土器 甕	口径24.0※ 器高7.1△	外面口縁部6～7条の平行沈線文。頸部ナデ。肩部貝殻腹線による刺突。磨耗のため調整不明瞭。内面口縁部ナデ、黒斑有り。頸部ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を含む)	良	内外面明黄褐色	
130	SK8 埋土	第37図 PL.32	弥生土器 甕	口径18.8※ 器高4.7△	外面口縁部9、10条の平行沈線文。頸部ナデ。内面口縁部ナデ。頸部ケズリ後ナデ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面浅黄褐色	
131	SK8 埋土	第37図 PL.32	弥生土器 甕	口径11.8※ 器高4.7△	外面口縁部ナデ。頸部刺突後ナデ消しか。全体に磨耗。内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。	密(砂粒を含む)	良	内外面にぶい黄褐色	
132	SK8 埋土	第37図 PL.32	弥生土器 甕	口径13.2※ 器高3.5△	外面口縁部・頸部ナデ。磨耗のため調整不明瞭。内面口縁部ナデ。頸部ケズリ。磨耗のため調整不明瞭。	密(砂粒を含む)	良	内外面橙色	
133	SK8 埋土	第38図 PL.32	弥生土器 壺又は甕	底径3.0※ 器高1.8△	外面底部ハケ後ナデ。底面ナデ。内面ケズリ後ナデ。	密(砂粒を含む)	良	内外面明赤褐色	
134	SK8 埋土	第38図 PL.32	弥生土器 壺又は甕	底径4.0※ 器高4.5△	外面底部ナデ、指押さえ。底面ナデ。内面ケズリ、指押さえ。	密(砂粒を含む)	良	内外面にぶい黄褐色	
135	SK8 埋土	第38図 PL.28	弥生土器 壺又は甕	底径4.2※ 器高6.1△	外面底部ナデ、ミガキ、磨耗のため不明瞭。底面ナデ。内面ケズリ、煤付着。	密(砂粒を含む)	良	外面にぶい橙・橙色 内面褐灰・にぶい黄褐色	
136	SK8 埋土	第38図 PL.28	弥生土器 壺又は甕	底径5.0※ 器高10.5△	外面胴部ハケ。底部磨耗のため調整不明瞭。底面ナデ。全体に煤付着。内面磨耗のため調整不明。	密(砂粒を含む)	良	外面にぶい黄褐色 内面浅黄褐色	
137	SK8 埋土	第38図 PL.32	弥生土器 壺又は甕	底径5.8※ 器高3.0△	外面底部ナデ、ミガキ。底面ナデ。内面底部ケズリ後ナデ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面橙色 内面灰黄褐色	
138	SK8 埋土	第38図 PL.32	弥生土器 壺又は甕	底径6.6※ 器高2.0△	外面底部ナデ。磨耗のため不明瞭。内面磨耗のため調整不明。	密(砂粒を多く含む)	良	外面橙色 内面浅黄褐色	
139	SK8 埋土	第38図 PL.32	弥生土器 壺又は甕	底径6.8※ 器高2.4△	外面底部ハケ、ナデ。底面ナデ。内面底部ケズリ。	密(砂粒を多く含む)	良	外面黒褐色 内面灰黄褐色	
140	SK8 埋土	第38図 PL.32	弥生土器 壺又は甕	底径8.4※ 器高2.7△	外面底部ナデか。磨耗のため調整不明。内面ケズリ。全体に磨耗。	密(砂粒を含む)	良	外面にぶい黄橙・褐灰色 内面淡黄色	
141	SK8 埋土	第38図 PL.32	弥生土器 壺又は甕	底径9.6※ 器高4.8△	外面底部磨耗のため調整不明、黒斑有り。底面ケズリ後ナデ。内面ケズリ。全体に磨耗。	やや粗(砂粒を多く含む)	良	内外面明黄褐色	
142	SK8 埋土	第38図 PL.27・29	弥生土器 高坏?	口径19.0※ 器高4.4△	外面口縁部11、12条の平行沈線文、煤付着。赤色塗彩。坏底部ナデ。内面ナデ。	密(砂粒を多く含む)	良	内外面にぶい黄褐色	坏部のみ遺存
143	SK8 埋土	第38図 PL.27・29	弥生土器 壺又は器台	底径14.1※ 器高11.1△	外面脚部ナデ、ミガキ。脚端部1条の凹線文。赤色塗彩。内面脚端部ナデ後ミガキ、磨耗のため不明瞭。脚部ケズリ、充填部ナデ。坏底部ナデ、磨耗のため不明瞭。	密(砂粒を多く含む)	良	外面明赤褐・橙色 内面にぶい橙色	
144	SK8 埋土	第38図 PL.28	弥生土器 高坏	器高6.5△	外面坏部・脚部磨耗のため調整不明。内面坏底部ナデ。脚部ナデ。全体に磨耗。	密(砂粒を含む)	良	内外面にぶい黄褐色	
145	SK8 埋土	第38図 PL.27・29	弥生土器 台付壺か	口径15.8※ 器高3.5△	外面口縁部・胴部ナデ、ミガキ。赤色塗彩。内面口縁部・胴部ナデ、ミガキ。赤色塗彩。	密(砂粒を多く含む)	良	外面赤褐・にぶい赤褐色 内面暗赤褐・赤褐色	
146	SK9 埋土	第39図 PL.26	土師器 坏	器高2.6△	内外面口縁部～体部ナデ。全体に磨耗。	密	良	内外面黄灰色	

表9 土器観察表(6)

No.	遺構(地区)層位名	挿図PL	種類器種	法量(cm)	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
147	P2埋土	第47図 PL.33	弥生土器甕	口径24.5※器高7.8△	外面ナデ。口縁部14条の平行沈線文。磨耗のため不明瞭な箇所有り。肩部連続刺突。内面口縁部ナデ、ミガキ。頸部ケズリ。	密(砂粒を含む)	良	外面にふい橙・暗褐色 内面橙・黒褐色	
148	P6グリッド攪乱土	第50図 PL.26	須恵器壺	底径10.2※器高4.1△	外面胴部回転ヘラケズリ後回転ナデ。底部ナデ。底部切り離し不明。内面胴部・底部回転ナデ。	密	良	内外面青灰色	

表10 石器計測表

No.	遺構層位名	挿図PL	種類	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
S1	SI1床直	第10図 PL.23	台石		29.5	37.9	10.6	15000.0	
S2	SI1埋土	第10図 PL.23	被熟磔		12.9	10.4	5.8	1070.0	
S3	SB1 P4埋土	第13図 PL.23	被熟磔		6.6	11.0	2.7	160.0	
S4	道路状遺構埋土	第22図 PL.26	石鏃	サヌカイト	1.9	1.5	0.4	0.9	
S5	SK8表土	第38図 PL.33	敲石		7.5	5.9	3.2	180.0	

表11 鉄器・鉄滓観察表

No.	遺構層位名	挿図PL	器種	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	形態・手法上の特徴
F1	SB1 P3埋土下層	第13図 PL.33	不明棒状品	6.8	1.3	0.5	-	やや薄手の棒状品で、上半を掘り切られるように欠損する。
F2	道路状遺構埋土	第22図 PL.33	碗形鍛冶滓	5.9	4.7	2.2	82.5	全体の5分の3程度遺存する。下面には粘土質(炉床土)が付着する。
F3	SK8埋土	第38図 PL.33	刀子	3.6	1.8	0.5	-	片関
F4	SK8埋土	第38図 PL.33	不明棒状品	2.95	1.4	0.4	-	薄手の棒状品で、一方端は掘り切られるように欠損している。

表12 SI・SBピット計測表

遺構名	ピット番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	
SI 1	P 1	60	50	48		
	P 2	40	32	38	柱痕跡あり	
	P 3	38	38	50	柱痕跡あり	
	P 4	48	46	40		
	P 5	70	60	18	中央ピット	
SI 2	P 1	64	64	48		
	P 2	36	36	56		
	P 3	30	26	62		
	P 4	32	28	58		
	P 5	108	100	36	中央ピット	
	P 6	25	20	10		
	P 7	20	20	20		
	P 8	36	32	20		
	P 9	32	32	12		
	P10	30	26	38		
	P11	28	20	48		
	P12	40	22	34		
	P13	22	22	48		
SB 1	P 1	42	38	80		
	P 2	42	40	66		
	P 3	46	46	76		
	P 4	56	46	76		
	P 5	48	42	70		
	P 6	44	40	70		
SB 2	P1	46	46	66		
	P2	46	42	56		
	P3	50	40	78		
	P4	52	44	64		
	P5	46	46	62		
	P6	64	40	58		
	P7	28	28	42		
	SB 3	P1	48	48	72	
		P2	34	32	62	
		P3	44	38	68△	
		P4	60	34	76	
	SB 4	P1	40	40	26	
		P2	40	40	18	
		P3	40	36	24	
		P4	40	40	20	
		P5	40	40	32	
		P6	40	40	18	
		P7	40	40	22	
	SB 5	P8	50	46	30	
		P9	40	40	22	
		P1	32	32	14	柱痕跡あり
P2		36	30	22	柱痕跡あり	
P3		52	30	28	柱痕跡あり	
P4		52	44	22		
P5		36	36	20		
P6		32	26	14	柱痕跡あり	
P7		42	38	10	柱痕跡あり	

### 第3節 自然科学分析の成果

#### 1 小竹下宮尾遺跡出土炭化材放射性炭素年代測定

株式会社 パレオ・ラボ

##### (1)はじめに

鳥取県西伯郡大山町に位置する小竹下宮尾遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

##### (2)試料と方法

測定試料の情報、調製データは表13のとおりである。

試料は炭化材2点である。試料No.1 (PL.D-12043)は土坑SK10より出土した最外年輪を残す枝状の炭化材である。試料No.2 (PL.D-12044)は土坑SK11より出土した部位不明の炭化材である。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

表13 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PL.D-12043	遺構:SK10 試料No.:1	試料の種類:炭化材(枝) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス
PL.D-12044	遺構:SK11 試料No.:2	試料の種類:炭化材 試料の性状:部位不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N) サルフィックス

##### (3)結果

表14に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を暦年代に較正した年代範囲を、第50図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、暦年較正の詳細は以下の通りである。

##### 暦年較正

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期 $5730 \pm 40$

年)を較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正にはOxCal4.0(較正曲線データ:INTCAL04)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表14 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 暦年代範囲	$2\sigma$ 暦年代範囲
PL.D-12043 試料No.: 1	$-28.75 \pm 0.13$	$345 \pm 25$	$345 \pm 25$	1488AD (25.3%) 1524AD 1559AD ( 3.3%) 1564AD <u>1570AD (39.6%) 1631AD</u>	<u>1466AD (95.4%) 1636AD</u>
PL.D-12044 試料No.: 2	$-26.52 \pm 0.18$	$361 \pm 22$	$360 \pm 20$	<u>1466AD (44.6%) 1521AD</u> 1592AD (23.6%) 1620AD	<u>1454AD (51.9%) 1525AD</u> <u>1557AD (43.5%) 1632AD</u>

#### (4) 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。

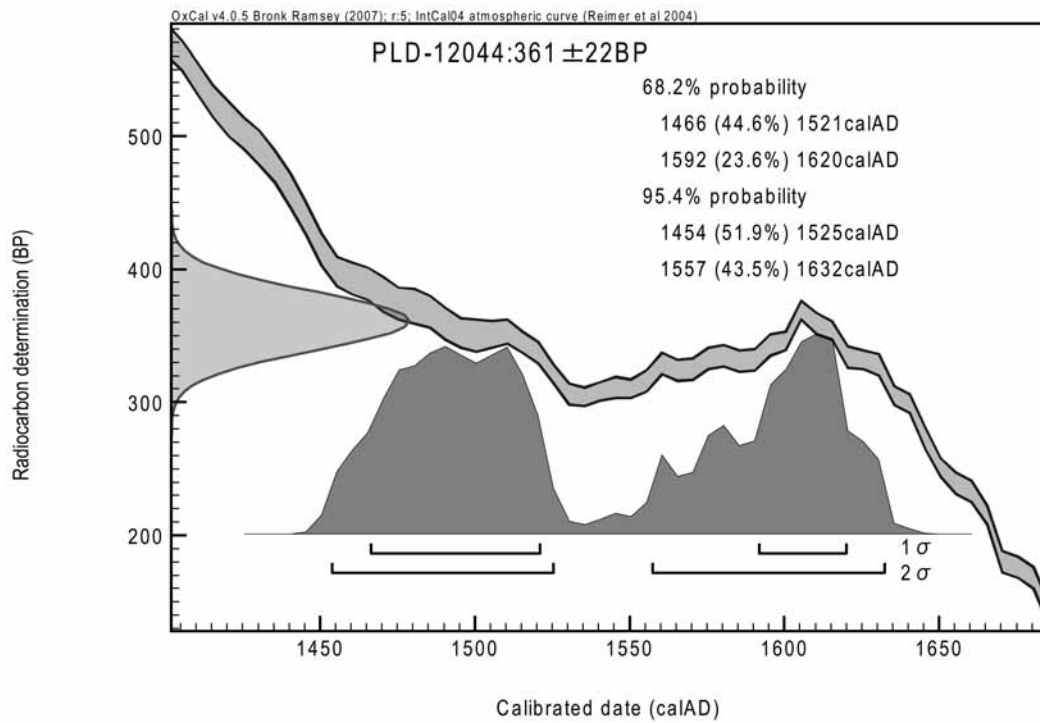
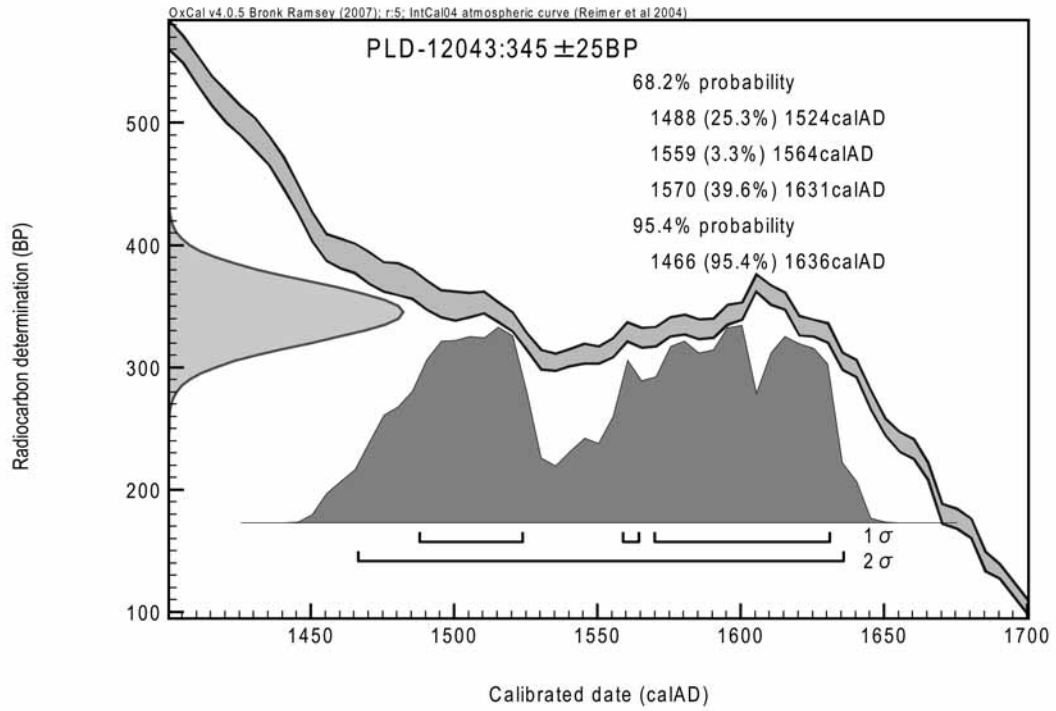
$2\sigma$ 暦年代範囲に着目すると、SK10の試料No.1は1466-1636calAD(95.4%)、SK11の試料No.2は1454-1525calAD(51.9%)および1557-1632calAD(43.5%)であった。いずれも15世紀後半～17世紀前半の暦年代範囲を示した。

なお、試料No.2は部位不明の炭化材であるため、内側の年輪である可能性がある。すなわち、試料No.2の暦年代範囲は木材の枯死・伐採年より古い可能性がある。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der PLicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.





第51図 暦年軟正結果

## 2 小竹下宮尾遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社 パレオ・ラボ

### (1)はじめに

小竹下宮尾遺跡は鳥取県の大山町に所在する、弥生時代と平安時代を中心とする複合遺跡である。弥生時代の遺構では竪穴住居跡などが検出された。また土坑には、底部に炭化材が堆積するものも認められた。ここでは、土坑から出土した炭化材の樹種同定を行い、樹種の検討を行った。また同一遺構より出土した、同定試料とは別個体の炭化材について、放射性炭素年代測定が行われている(前項参照)。なお同定にあたり、森林総合研究所の能城修一氏の御教示を得た。

### (2)試料と方法

試料は、弥生時代の土坑であるSK10から出土した炭化材2点である。試料は鳥取県埋蔵文化財センターによって炭化物層から任意に抽出された。試料は原形を保っておらず、形状の計測等を行わなかった。

樹種同定は、炭化材の横断面(木口面)を手で割り実体顕微鏡で予察し、炭化材の横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柁目)を5mm位に整形したあと、直径2cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し試料を作製した。この後金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡で同定・撮影を行った。同定試料の残りは、鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。

### (3)結果

同定の結果、広葉樹のクスノキ属とヤマハゼが各1点産出した。表15に樹種同定結果を記す。次に同定された材の特徴を記載し走査型電子顕微鏡写真を示す。

#### クスノキ属 *Cinnamomum* クスノキ科 写真3 1a-1c(No.2)

中型の道管が単独又は2～3個放射方向に複合して散在する散孔材である。軸方向柔細胞は周囲状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は先端1～2列が方形となる異性で、1～3列となる。放射組織内には、油細胞がみられる。

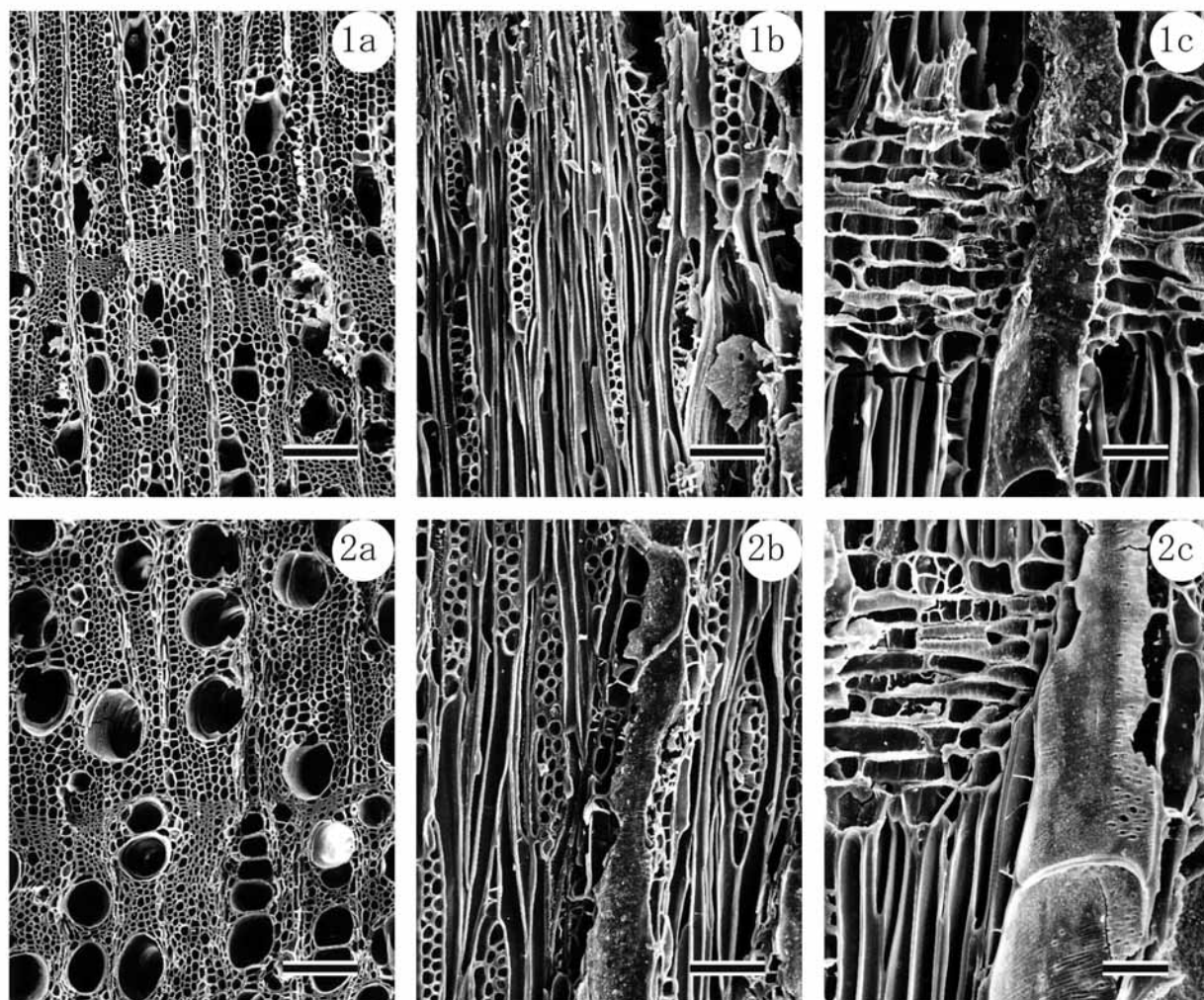
クスノキ属にはクスノキやヤブニッケイなどがあり、暖帯から亜熱帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なクスノキの材は中庸で、切削加工等は容易である。

#### ヤマハゼ *Rhus sylvestris* Siebold et Zucc. ウルシ科 写真3 2a-2c(No.2)

中型の道管が単独又は2～5個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は先端1列が方形になる異性で、1～3列となる。放射組織内には結晶がみられる。

表15 出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	遺構名	出土位置	樹種
1	SK10	底面付近	ヤマハゼ
2	SK10	底面付近	クスノキ属



1a-1c.クスノキ属 (No.2) 2a-2c.ヤマハゼ (No.1)

a:横断面(スケール=100 $\mu$ m) b:接線断面(スケール=50 $\mu$ m) c:放射断面(スケール=25 $\mu$ m)

写真3 小竹下宮尾遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

ヤマハゼは東海以西の本州、九州、四国などの暖帯から亜熱帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工等はやや容易である。

#### (4) 考察

同定の結果、SK10からはクスノキ属とヤマハゼが産出した。現在の植生では、クスノキ属、ヤマハゼは鳥取県域の森林に普通に見られる樹木である。また放射性炭素年代測定の結果では、 $2\sigma$ の値で1466-1636calAD(95.4%)が得られ、中世から近世の年代を示した。

SK10の試料は、出土状況より燃料材の残渣が廃棄されたものと考えられている。土坑が利用されていた時代の小竹下宮尾遺跡周辺の森林では、クスノキ属とヤマハゼが生育し、それを燃料として利用したと考えられる。

## 第4節 総括

### 1 調査成果のまとめ(第52図)

調査の結果、小竹下宮尾遺跡では弥生時代後期、平安時代を中心とする遺構、遺物を確認した。遺物がまとまって出土した遺構が少ないこともあるが、出土土器相は弥生時代後期後葉、平安時代前半(9～10世紀頃)の2時期にほぼ限定される。ここでは、これらの時期を中心に改めて内容を整理し、まとめに代えたい。

#### 縄文時代

本調査において、縄文時代に明確に帰属する遺物は出土していない。ただ、形態から落とし穴とみられる土坑を6基(SK1～6)確認した。また、古代の道路状遺構からの出土で縄文時代に帰属するかは不詳ながら、サヌカイト製の石鍬が出土した。

#### 弥生時代

本調査では、後期後葉に帰属する遺構・遺物を確認したが、前後する時期の遺物はほとんどみられず、単一な様相を呈している。該期の遺物が出土した遺構は、竪穴住居跡2棟(SI1・2)、土坑2基(SK7・8)である。

竪穴住居跡SI1・2は共に、床面の南側を部分拡張している。SI1の支柱穴における柱掘り方埋土は、比較的細かな単位で詰められ特徴的だが、基本的には当地域における一般的な住居といえる。

SK8の埋土上層からは、多数の土器が出土した。第2節で述べたとおり、土層確認用ベルトが記録前に崩落したため詳細な検討が不可能となったが、堆積状況から判断するとこれらの土器は一括廃棄された可能性が高い。一方、埋土下層からは遺物の出土が無く、本遺構が営まれた時期については判然としない。機能については、深さから井戸の可能性を想定したが、現状では積極的な根拠はない。

以上のように遺構密度は高くないが、弥生時代後期後葉における集落が調査地を含めた周辺に展開することが明らかとなった。

#### 古代

南北方向に調査区を貫通する道路状遺構を検出した。浅い溝状の掘り方を持ち、埋土中には土器片を中心に多数の遺物を包含しており、主体となる土器群は概ね9世紀代～10世紀前後に比定できる。出土土器の器種組成についてみると、須恵器、土師器の坏・皿類のほか、土師器甕の出土が目立った。これらは日常雑器と考えられ、近隣における集落の存在を示唆する。しかしながら本調査において、該期に帰属することが明確な遺構は他に確認されていない。なお、道路状遺構の詳細については、次節で述べる。

#### その他、帰属時期が不明瞭な遺構

5棟確認している掘立柱建物跡については、遺物の出土がほとんどなく時期比定が困難なため本項に記載するが、柱掘り方や埋土の特徴からSB1～3とSB4・5の2グループに大別し、可能な限りその帰属時期について考える。

SB1～3の柱穴は径40～50cm程度と平面的にはやや小規模ながら、検出面からの深さは50～80cmと深く掘り込まれる点で共通する。また、柱掘り方埋土が互層状を呈することも特徴として指摘できる。SB2・3は主軸も似通っている。さらに、SI1における支柱穴埋土と、SB1～3の柱掘り方埋土と色調、埋め方が近似する。このことから、SB1～3とSI1は同様な時期に帰属する可能性を

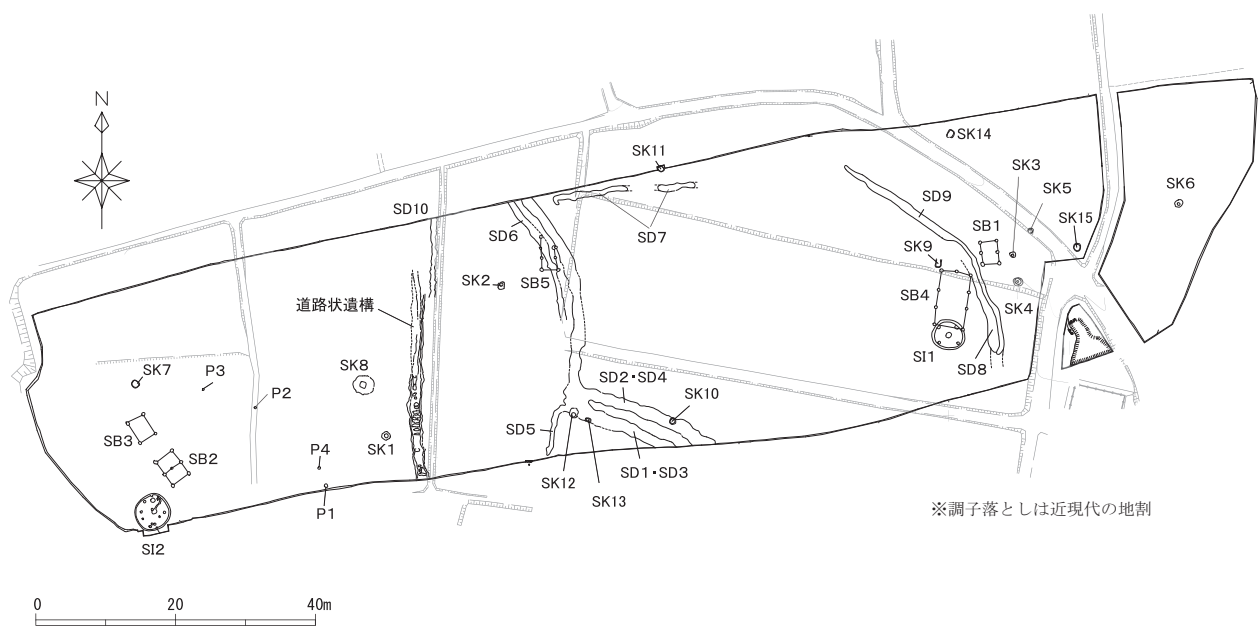
考える。また、これらの掘立柱建物跡は各々 SI 1・2 に近接し、互いの配置関係からも関連性の高さが窺える。ただ、SI 2 と SB 2 については互いの距離が 2m 程度と近過ぎ、同時併存とするには困難である。SI 1・2 を中心としたこれらの建物の配置が東西に分散している理由については判然としませんが、調査地が集落の縁辺部をかすめた可能性を考えるのが現状では妥当である。

SB 4・5 は、埋土の色調が黒褐色を主体とし、各柱穴の深さが 13.5～35cm と浅く、先に触れた SB 1～3 とは異なる様相を示している。また、M7 グリッドで認められる P1・P4 は黒褐色を呈する埋土を持ち、深さはそれぞれ 11cm、17cm と浅く、SB 4・5 の柱穴と類似する。これらは掘り方上位の多くを削平により失っていると予想できる。出土遺物が無く時期判断の材料を欠くが、本遺跡における土器相から考えると、古代に帰属する可能性が最も高いと考えるのが妥当である。道路状遺構における遺物出土量の多さと、該期遺構の少なさにみられる齟齬については、限られた調査範囲のため遺構の主要な分布域から外れたことをまず考えているが、畑作など後世の改変で遺構の多くが失われたことも想定する必要がある。

本調査において、中世以降の遺物はほとんど出土していない。調査で検出された溝のうち、SD 2 から中世に帰属する可能性を持つ資料が出土しているが、小片のため明確ではない。ただ、SD 2 と重複する土坑(SK10)から採取した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施したところ、15世紀後半～17世紀前半との結果を得た。SD 2 と SK10 の先後関係が不明なこともあり、溝群の時期は不詳だが、中世以降に帰属する可能性が高いと考える。

溝の中には SD 2 のようにほぼ直角に屈曲するものや、SD 7・8・9 のように現道とほぼ並行するものがある。営まれた時期は先述のとおりはっきりしないが、その配置から過去の農業用通路や地割に関わるものと想定できる。これらの溝や現道に接して検出された土坑(SK12～15)は、位置関係から関連性が高いと考えているが、具体的には不明である。また、道路状遺構は近現代の地割にほぼ重なり(第52図)、この箇所においては地割の淵源が古代にまで遡ることを示唆している。

以上、主要な調査成果について概観してきた。現状では本遺跡周辺の発掘調査事例が少なく、実態については不明な点が多いが、今後の事例増加により解明されていくことが期待される。



第52図 遺構配置図

## 2 道路状遺構について(第53・54図、表16、写真4・5)

まず、本調査で検出した道路状遺構について主要な特徴を以下に改めて列挙し、整理を行う。

- ・幅1.5～2m程度の溝状の掘り込み(以下、「溝」と呼称)が認められ、南北方向に調査区を貫通する。検出面からの深さは概ね8～18cm。
- ・溝埋土は黒褐色を呈し、よく締まる。層中には土器片を中心とした遺物を多数包含する箇所が有る。土器は小片が多く、全般に磨耗が進行する。
- ・側溝は認められない。
- ・溝の底面、壁面にわたり硬化する。硬化面上に明確な轍等の通行痕跡は認められていない。
- ・溝底面には、波板状凹凸面が認められる。波板状凹凸面は溝検出範囲の南半で認められるが、L6グリッド付近で途切れる。
- ・L6グリッド以北は溝底面に、幅約60cm、深さ5cm程度の小規模な溝状の凹みが延びる。
- ・波板状凹凸面における凹み内は硬化していない。一方で溝状の凹み内は硬化する。

以上が調査で得られた道路状遺構の主な知見であるが、これらをもとに本遺構の構造について、ここでは以下の2通りの可能性を提示し(第53図)、それぞれの問題点等について述べていきたい。

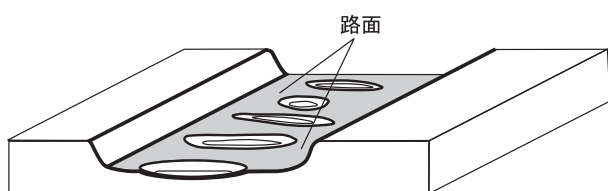
①：溝底面が路面(道として使用された面)となる。

②：溝底面が道路構造上の路床部に該当する。

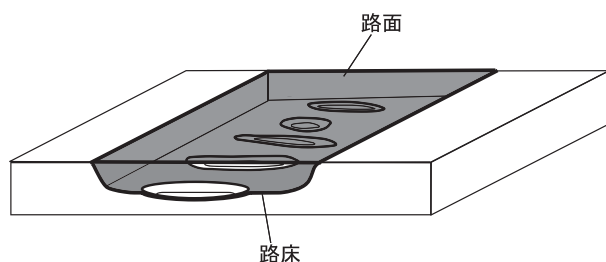
①を採用した場合、溝の硬化面は作道時における路面強化、又は道としての使用により生じたものと想定できる。波板状凹凸面の凹み内が硬化していないことを重視すれば、路面が使用に伴い欠損した痕跡とも理解できる。ただ、溝底面における土質の差異が認められないにも関わらず、途中で波板状凹凸面が途切れ、溝状の凹み(凹み内は硬化)がみられる点が現状ではうまく説明できない。また、溝状の凹みが通行による痕跡かどうかは、良好な事例に乏しく、現状では積極的に判断できない。溝埋土については、多くが付近から自然流入したことになるが、まとまった量の土器片を包含し、人的な関わりが窺える割にはロームブロックなどの混入が少ない堆積であり、違和感がある。

②においては、溝の硬化面が路床強化によるものと理解できる。硬化面が溝底面だけではなく、壁面の立ち上がりにも一部及び、広範囲に安定して認められることは、通行など路面使用によるものではない可能性を高める。ただ、作道時に路面強化のため溝底面やその周辺を硬化させた可能性も考えられるため一概には判断できない。本案を採用した場合、溝埋土は路面整地用となり、人為的にもたらされたことになる。埋土中の土器片は路面強化の一要素と捉えることも可能である。ただ、本例では路面が溝埋土上面において確認できたわけではなく、推測の域を出ていない。また、溝掘り方の上位は後世の開発で失われていることが予想され、本事例における検討の限界を示すものである。

【模式図①】



【模式図②】



第53図 道路状遺構模式図

以上、本遺構の構造について大雑把ながら2つの可能性について述べたが、いずれも不明瞭な点を残し、決め手に欠けるのが現状である。ここで、鳥取県内における他事例を概観してみたい(第54図、表16)。古代を中心に中世、近世の調査例が目立つ。溝底面等に連続するピット列、もしくは硬化面が一定の範囲で確認され本調査例と類似するもの、一定の幅で並行する溝を側溝と捉え、道路状遺構とする例、石敷のものなど様々である。このように多様な様相を示す道路状遺構であるが、後世の攪乱等の影響を受けやすく、現状では上記の①・②といった、構造について詳細な検討が行える事例に乏しい。その中で、倉吉市向野遺跡は遺存状態の良好な数少ない例といえる。

向野遺跡では3次にわたる調査が実施され、道路状遺構を多数検出している。そのうち、1次調査の1号溝状遺構、2次調査の2号道路遺構、3次調査の3号道路遺構は、9世紀～12世紀にかけて営まれたと推定され、規模や作道手法が類似する(岡平2004・2005)。丘陵を溝状に開削し、溝底には波板状凹凸面が形成される。次いで硬化した土が充填され路面が設けられる(古段階)。以後数多くの補修を経て、溝埋土上位には硬化面が複数認められ、新段階の路面と把握されている。上記で提示した本調査における②案に類似する。ただ、向野遺跡は伯耆国庁の至近に立地し、その影響力を強く受けている可能性が高く、路面幅は広いところで5～7mを測り規模的に本調査例を大きく凌駕する。このように構造の類似だけでなく、立地や近隣遺跡の様相など、敷設の背景を踏まえ個々の道路状遺構について検討していくことが必要と感じる。今後の課題としたい。

小竹下宮尾遺跡の所在する丘陵の北端は、歴史地理学的成果によれば、古代山陰道の推定路線上に位置する(日野1991・中林1997・中森2005)。当該地点西側の推定路線上には、奈和駅と目される馬郡遺跡、長者原遺跡が所在する。最近、推定路線上に位置する名和下菖蒲谷遺跡(写真5)で大山町教育委員会により、トレンチ調査が実施され、遺物が無く古代山陰道とは断定できないものの、道路状遺構が確認されている<sup>(1)</sup>。ここで本遺跡例に注目すると、帰属時期(9～10世紀前後)から古代山陰道と併存した可能性が高いこと<sup>(2)</sup>、北方の延長線上に山陰道推定路線が存在するという位置関係から、関連性が窺われる。ただ、古代山陰道そのものの調査例がほとんど無く、その実態、支道のあり方など、現状では詳細不明である。したがって、本遺構の山陰道との関わりからみた評価については、山陰道をはじめとする駅路との接続が明らかな道路状遺構の調査事例など、成果の蓄積をもって比較検討すべきと考える。今後の調査成果に注目していきたい。

#### 【註】

- (1) 平成21年度以降に調査報告書刊行予定である。
- (2) 9～10世紀代の駅路は、「後期駅路」と呼称され、7世紀後半～8世紀後半に営まれた「前期駅路」と比較し、幅員の縮小、路線の若干の変化などが指摘されている。  
中村太一2000『日本古代道路を探す』平凡社新書045



写真4 古代山陰道推定ルート近景

小竹下宮尾遺跡が所在する丘陵北端部を東から望む。

参考文献

- 岡平拓也2004 『向野遺跡第3次発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 岡平拓也2005 「東伯耆の古代交通遺跡」『第33回山陰考古学研究集会 山陰における古代交通遺跡資料集』山陰考古学研究集会
- 中林 保1997 『因幡・伯耆の町と街道』富士書店
- 中森 祥2003 「鳥取県における道路状遺構について」『名和乙ヶ谷遺跡』鳥取県教育文化財団
- 中森 祥2005 「西伯耆における道路状遺構と条里跡」『第33回山陰考古学研究集会 山陰における古代交通遺跡資料集』山陰考古学研究集会
- 日野尚志1991 「伯耆国の駅路について」『佐賀大学教育学部研究論文集』第38集第2号(1)

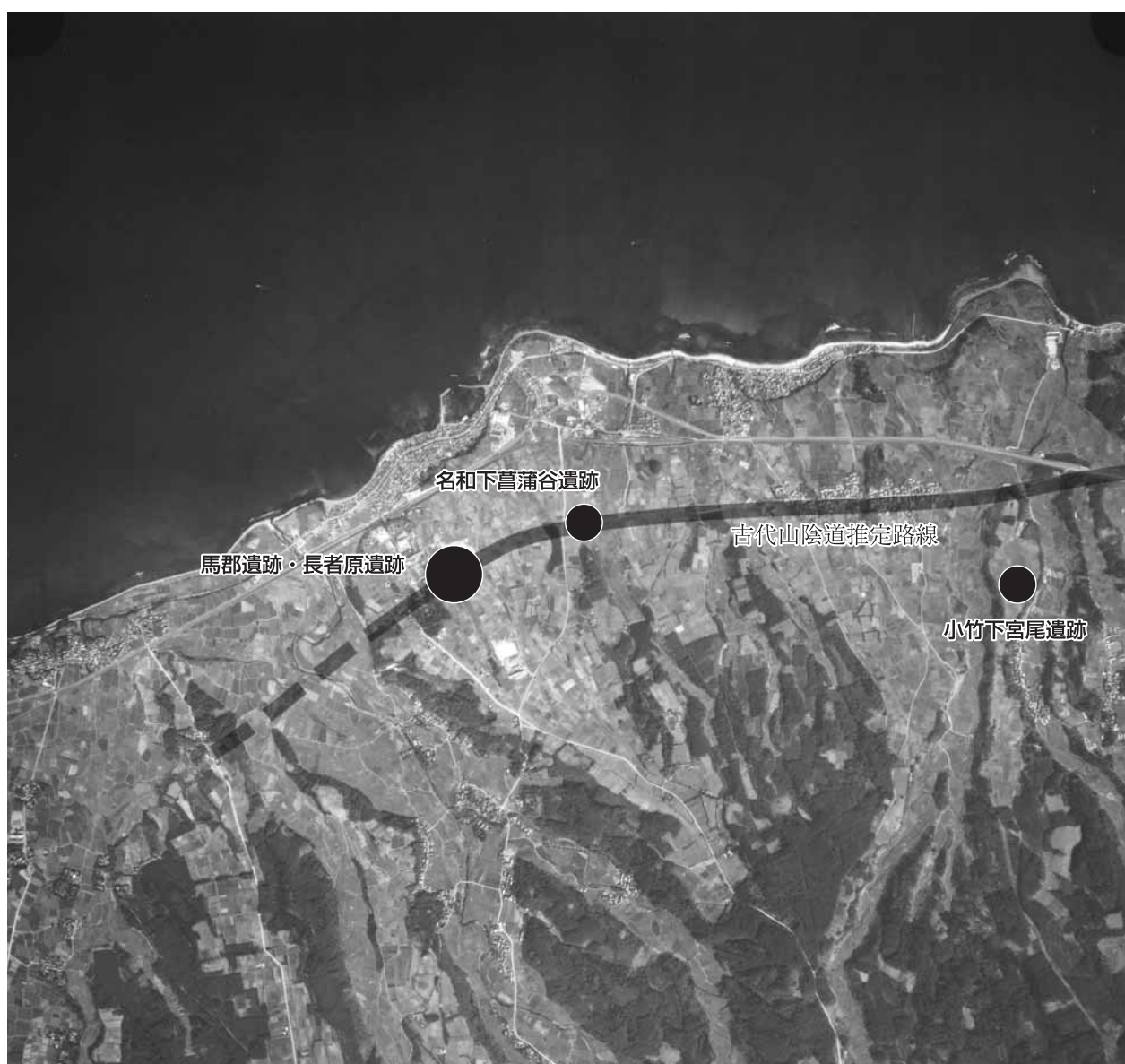


写真5 小竹下宮尾遺跡周辺航空写真

(昭和43年撮影 鳥取県立博物館提供)



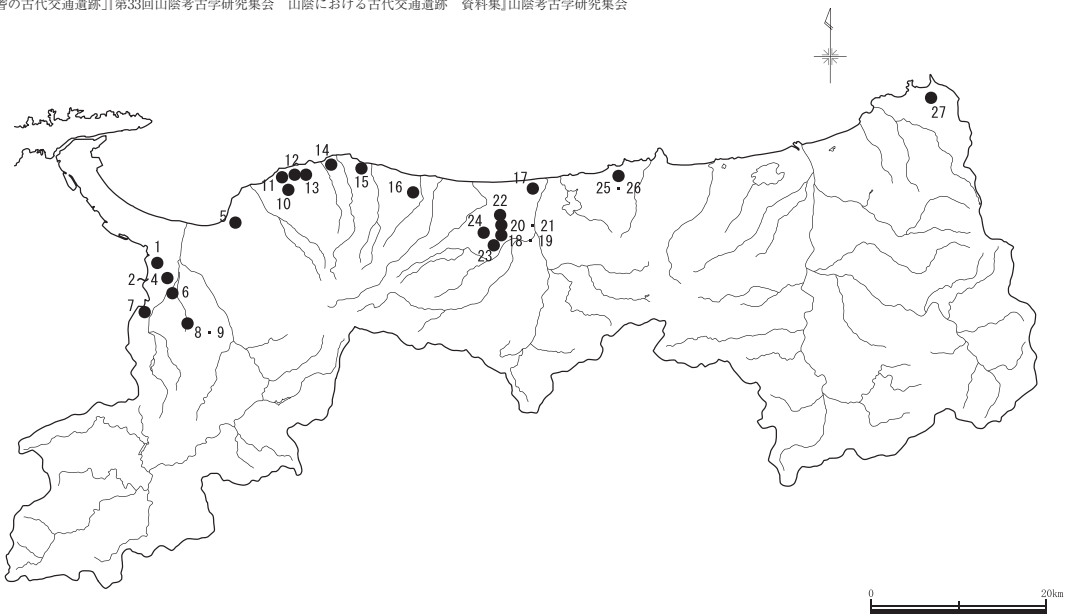
表16 鳥取県内における道路状遺構一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅(m)	備考	番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅(m)	備考				
1	陰田第6	米子市陰田	石敷道路	7～8世紀	1.2		15	福留遺跡	琴浦町福留	第1道路状遺構	8世紀後半?	2.26	溝状掘り込み、硬化面、ビット列				
			道路状遺構	平安時代	溝間2～3	側溝				第2道路状遺構	8世紀後半?	1.55	硬化面、ビット列				
2	橋本徳道西	米子市橋本	SF-01	7世紀末～8世紀以降	1.8～2.7	溝状掘り込み、ビット列	16	井園地頭	琴浦町田越	SD7	7世紀前～中葉	0.3～0.8	溝状掘り込み、硬化面				
			SF-02	不明	1.2～1.8	溝状掘り込み、ビット列				SD9	平安時代	1.3	溝状掘り込み、硬化面				
			SF-03	不明	0.8		17	曲管峰	北栄町曲	第1遺状遺構	不明	1.4	溝状掘り込み				
			SF-04	不明	1.5～2.8	溝状掘り込み、ビット列、硬化面					18	伯耆国守跡	倉吉市国府	SF03	不明	3.2～3.5	ビット列、硬化面
			SF-05	不明	溝間9.2	側溝?								19	宮ノ下	倉吉市国府	遺構1
3	橋本徳道	米子市橋本	道路状遺構1	近世以降	-	硬化面2条	20	河原毛田	倉吉市国分寺	SD01・SD02	平安時代?	溝間15	側溝?				
			道路状遺構2	近世以降	-	硬化面2条				21	向野(1次調査)	倉吉市大谷	1号溝状遺構	平安時代以降	1.5～2.4	溝状掘り込み、ビット列、硬化面、溝内被熱	
			SD5・6	中近世	1.3	側溝?	2号溝状遺構	平安時代以降	-				溝状掘り込み、ビット列				
4	橋本漆原山	米子市橋本	道路状遺構1	近世以降	0.6～2.0	硬化面、ビット列併用	3号溝状遺構	平安時代	1.6				溝状掘り込み、ビット列、硬化面、溝内被熱				
			5	福岡柳谷	米子市福岡	SR001	不明	2.2	硬化面、側溝有?	4号溝状遺構	平安時代	1.0	溝状掘り込み、ビット列、硬化面、溝内被熱				
石敷道路	中近世	1.5～2.8				3条確認(01～03)	5号溝状遺構	平安時代	1.0	溝状掘り込み、ビット列							
6	天萬土井前	南部町天萬	SC01	近世	溝間約3	側溝、硬化面?	向野(2次調査)	倉吉市大谷	1号道路遺構	平安時代	溝間7.75	側溝、ビット列、硬化面(幅最大7.3m)					
7	北方廣畑	南部町北方	階段状不明遺構	7～8世紀?	2.5				2号道路遺構	平安時代以降	15	溝状掘り込み、ビット列、硬化面(幅5.0～7.3m)					
8	金田堂ノ脇	南部町金田	SS01	近世	2.5	ビット列	向野(3次調査)	倉吉市大谷	1号道路遺構	平安時代	-	ビット列、硬化面					
9	御内谷向田	南部町御内谷	SC-01	17世紀前半	溝間0.6～1.5	側溝			2号道路遺構	平安時代以降	路面幅約2	ビット列、硬化面					
10	名和乙ヶ谷(2003)	大山町名和	道1	平安時代初頭	3.0	溝状掘り込み、硬化面			22	クズマ	倉吉市上神	1号溝状遺構	7世紀前半～8世紀代	4.5	溝状掘り込み、ビット列、一部硬化		
			道2		4.4		2号溝状遺構	7世紀前半～8世紀代									
			道3	平安時代初頭	1.5	溝状掘り込み、ビット列	クズマ	倉吉市上神	1号溝状遺構	※第2次と同一遺構	約5	溝状掘り込み					
			道4	平安時代初頭	1.2	浅い溝状、硬化面				2号溝状遺構	※第2次と同一遺構	-	溝状掘り込み、硬化面欄列を併用				
			道5	平安時代初頭	0.8	溝状掘り込み、硬化面、ビット列					23	後口山	倉吉市桜	1号遺状遺構	不明	0.9～2.8	溝状掘り込み、ビット列
			道6	平安時代初頭	1.1	溝状掘り込み、硬化面、ビット列	24	雨堤	倉吉市上福田	1号道路遺構	不明	3.3	ビット列				
			道7	近世	6.0	溝状掘り込み、ビット列				25	小浜小谷	湯梨浜町小谷	SD01	不明	1.4	溝状掘り込み	
11	門前第3	大山町門前	第1溝状遺構	不明	0.6	溝状掘り込み、硬化	26	池ノ谷第2	湯梨浜町池ノ谷	SD02	不明	-	溝状掘り込み				
			道1	平安時代初頭	1.0～4.2	溝状掘り込み、硬化面				27	上野古道	福部村左近	石置遺構	近世以降	0.7～1.0		
道2	平安時代初頭	1.5～1.8	溝状掘り込み	12	名和下菟浦谷	大山町西坪		不明	-								
13	小竹下宮尾	大山町小竹	道路状遺構	9～10世紀前後	1.5～2.0	溝状掘り込み、硬化面、ビット列											
14	住吉	大山町住吉	ASD-1	古墳時代?	約1	溝状掘り込み、硬化面、ビット列											

※幅：原則として溝状掘り込み上面計測値

【参考文献】

中森 祥2003「鳥取県内における道路状遺構について」『名和乙ヶ谷遺跡』鳥取県教育文化財団  
 岡平拓也2005「東伯耆の古代交通遺跡」『第33回山陰考古学研究会 山陰における古代交通遺跡 資料集』山陰考古学研究会



第54図 鳥取県内における道路状遺構検出遺跡